
コナンへの思いの爆発

たくみ226

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナンへの思いの爆発

【Nコード】

N9961A

【作者名】

たくみ226

【あらすじ】

ある日、立て続けにコナンに哀・蘭がコナンに対して言いたいこと・思ってたこと告白する恋愛？系な話です。しかし、その告白の内容は、コナンにとって思っても見ないもので、コナン・蘭・哀の関係が最悪の事態となっていく・・・

第1シリーズ哀の告白 前編（前書き）

この話は以前私が投稿したコナンへの思いの爆発〜灰原編〜と、その続編になる話をまとめて連載としています。

この話は、コナンへの思いの爆発〜灰原編〜を後の話を円滑に行うために多少加工しておりますので、加工による抗議はご遠慮ください。

第1シリーズ哀の告白 前編

コナンの悲劇・・・ 1日目

その灰原からの告白はいきなりだった・・・

コナンは学校からの帰りに、同級生の灰原哀に「一緒に家まで来てくれない？ちょっと話したい事があるから。」
こう誘われたのだ。博士は発明発表会がグアムであるため、今日の朝に飛行機に乗って、あさってまで帰ってこない。ということは、もちろん哀とコナンの2人っきりで阿笠邸にいることとなる。

阿笠邸

哀「ゆっくりして行って。はい、コーヒー。ブラックでいいんですよ？」

コナン「ありがとう。灰原。あっち（探偵事務所）じゃ蘭が飲ましてくれないからな。」

コナンはコーヒーを飲み始めた。

コナン「それで、灰原、話って何だ？まさか解毒剤ができたのか？」

哀「一応あることはあるけど・・・」

コナン「本当か？」

哀「待って！それはまだマウスにもしていない試作品！！」

コナン「えっ！？オレにそんな危険なもの？」

第1シリーズ哀の告白 後編

哀は、コナンに自分の思っていることを全てぶつけた。

哀「そう、私はあなたが好き。私がこの家に来た最初のころは、あなたはただの薬の被験者としてしか思ってなかったわ。だけど、今は違う。」

コナン「どういうことだ!？」

哀「工藤君、私を守ってくれてるって言うてくれたわね?その時なのかな私、工藤君のことが”好き”だと思ったの。」

コナン「は、灰原、本当か?」

哀「誰がこんな所で嘘つく必要があるのよ?」

コナン「わりい・・・俺は・・・」

哀「(そうよ、工藤君、アナタには彼女がいる、待ってるのだから・・・)」

コナン「オレは・・・オレは・・・」

哀「工藤君・・・アナタ優しいから、私をどう振ろうか迷ってるのね?」

コナン「えっ・・・」

哀「アナタが蘭さんのことが好きだと知ってる上で言ったの。そう、どうしてもあなたに言うておきたかった。」

コナン「・・・オレは、灰原は好きだ、もちろん、少年探偵団のみんなも、博士たちも・・・でも、蘭だけは誰よりも愛してるし、蘭だけに特別な愛情を注ぎたいと思ってる・・・」

哀「やっぱりそう言うと思った。」

コナン「えっ・・・」

哀「いや、何でも無い・・・」

コナン「一つ聞いてもいいか？」

哀「何？」

コナン「お前、昔は蘭が嫌いだったけど、今は蘭の事好きなんじゃないのか？」

哀「えっ・・・」

コナン「前はお前、蘭のこと嫌いじゃないのかなと思ってたけど、最近、そうでもないように見えたから、なんかお前、誰かに重ねあわせてる様な・・・そんな感じがしたんだ。」

哀「・・・」

コナン「オレの推理、違ってたか？」

哀「当たってるわね。最も、アナタは自分に対しての人からの感情だけは全く分かってなかった様だけどね。」

コナン「・・・エツ？」

哀「何でもない。ただ、私は彼女（蘭）のことをお姉ちゃんと重ねあわしてたのかもしれない。なんか風格が、性格っていうのかな、オーラみたいなものが似ているように見えたから・・・」

コナン「・・・」

哀「私の話ばかり聞いてもらって悪かったわね。もう5時半だから、彼女のいる家に帰ったら？」

コナン「わりいな・・・じゃあ、また学校でな。」

哀「ええ、また明日。」

こういうことで、灰原のコナンへの告白は幕を閉じた。

第1シリーズ哀の告白 後編（後書き）

こんばんは。たくみ226です。

本当は哀の告白は短編で、蘭は蘭で短編で・・・としていきたくったんですが、連載のほうが管理しやすいので連載にまとめました。哀編はこれで終了します。次は蘭編になります。

第2シリーズ蘭の告白 新一と待ち合わせ編（前書き）

ココから蘭の告白に入ります、蘭はコナンに対して一体どんな告白をするのでしょうか・・・

第2シリーズ蘭の告白 新一と待ち合わせ編

毛利邸 6:30

コナン「ただいま」

蘭「お帰り」

コナン「どうしたの？」

蘭「今日8時に米花センタービルの展望レストランで新一と待ち合わせしてるから」

コナン「そ、そうなんだ・・・そういえば今朝言ってたね。(やっべく、灰原に薬をねだるの忘れた!!)」

蘭「コナン君も今から行こう！」

コナン「え、でも博士ん家に忘れ物・・・」

蘭「今からよ!!(半ば怒)」

こうして強引に蘭によって米花センタービルの展望レストランに連れて行かされた。

コナンはこの後に起こることを知らないで・・・

米花センタービルの展望レストラン

席は、新一が蘭に告白しようとしたとき(コミックス26巻参照)の”隣”だった。

コナン「(「アレ？米花センタービルだったらあの席のはずなのに・
・蘭がプロポーズしたいわけではなさそうだな。ハハツ・・・」

というのは、強引に蘭が新一を誘い、蘭から一方的にメールが送ら
れてきて、文面は

.....
.....
.....

差出人：毛利蘭

件名：新一、デートして!!

新一、あさって私とデートして!!

場所は米花センタービルのこの前新一といったレストランの前にい
るから、新一はレストランの前で待ってて!!来ないと今度会った
ときにどうなってるか分かってるんでしょね・・・(怒)

蘭より

.....
.....
.....

だったので、^{コナン}新一は全く席を知らなかったのだ。

コナン「蘭姉ちゃん、前に新一にいちゃんところに来たときの席と
は違うね？」

蘭「うん、ちよつとね・・・コナン君、私新一を待ってるからお店
の前にいるね。コナン君、迷子になっちゃだめだから、絶対にそこ
を動かないでねっ！」

コナン「はぁ〜い。(博士が灰原に来てもらって、解毒剤貰っか・

1 ()

第2シリーズ蘭の告白 新一と待ち合わせ編（後書き）

こんばんは、たくみ226です。

ココから前・中・後編の3編程度の予定で蘭編に入ります。蘭はコナンにどんな告白をするのか？また新一の処遇は・・・

第2シリーズ蘭の告白 コナン、解毒剤要求編

コナンはこの重大さを理解してるのですぐに阿笠博士と、灰原哀に連絡したが・・・

コナンの携帯「プルルル・・・」

阿笠博士の自宅電話「（博士の声）はい、阿笠です、ただいま留守に・・・」

コナン「くっそ・・・博士も灰原も留守だった？今度は博士の携帯だ！」

こういつてあせって博士の携帯にかけた・・・

コナンの携帯「プルルル・・・」

阿笠博士の携帯「こちらはココモ（携帯会社）です。お掛けになった電話は・・・」

コナン「そっか・・・博士はグアムで無理だな・・・最後は灰原！！」
今まで以上にあせって灰原の携帯に電話をかけたが・・・

コナンの携帯「プルルル・・・」

灰原の携帯「こちらはBU（携帯会社）です。お掛けになった電話は・・・」

コナン「くっそ・・・灰原の携帯切っちゃがる・・・もう無理じゃないか・・・こうなったら蘭を麻酔銃で眠らして・・・」

その時、背後からコナンに向けて声がした・・・

蘭「コナン君、何してたの？・・・もしかして、博士が哀ちゃんを

呼ぼうとしてなかった？」

コナン「ハハハ・・・なんでこんなときに博士や灰原を・・・」

蘭「まあいいわ・・・それにしても新一のヤツ、何で約束の時間から30分も過ぎてるのに来ないのかしら？（怒！）」

コナン「ちよつとしたら、新一兄ちゃん、事件が一段落ついてないから行けないんじゃないの？」

蘭「それならそれで連絡してくれてもいいじゃない・・・」

コナン「蘭姉ちゃん、もうすぐ料理来るんじゃないの？」

蘭「まあ、なるようになるんじゃない・・・」

ウエイトレス「お客様、こちら2人前の前菜になります。」

コナン「えっ・・・（2人前だって？蘭、コナン、新一で3人のはずじゃあ・・・まさか、まさか・・・）」

蘭「コナン君、そんなに怖い顔して、何考えてたの？早く食べよう！」

コナン「そうしよう。蘭姉ちゃん」

こうしてコナンと蘭は前菜を食べ終えた。コナンは新一が来ないと思っ
て2人で食事したと思ったその時蘭があることを言った・・・

第2シリーズ蘭の告白 蘭、正体暴く

蘭「コナン君、アナタ新一でしょ？」

コナン「エッ・・・なんで僕が新一兄ちゃんなの？（蘭にばれちゃってるじゃん、誰がばらしたんだ？）」

蘭「いやっ、適当に言ってみただけよ、ごめんねコナン君。あんなやつと一緒にして。」

コナン「（おい、あんなヤツって・・・）」

蘭「でも、何で新一が来ないんだろ、もう私のこと忘れて他の女とどっかに駆け落ちでも・・・」

コナン「それは無いんじゃない？」

蘭「そうしてコナン君が新一の事を分かりきって言うの？」

コナン「・・・多分、新一兄ちゃんはそう思ってるんじゃないかな〜って思ってるし、僕は、蘭ねちゃんと新一兄ちゃんはお似合いのカップルかなあ〜って思ってるから。（オイ、何言うんだオレ？）」

蘭「新一ったら、もうサイテーエ!!! もう大っ嫌い!!! 音信不通にしてやる!!!（怒）」

その時コナン（新一）は、蘭の全体を怒りの炎が覆っている感じがした様に思えた。

さすがにコナン（新一）はこの言葉に応えたのである。なぜなら、APTXの解毒剤手に入り、コナンが新一に戻っても、一番必要にされていない人に何もできないからだ。

そう、コナンはここで感情的になってしまった。蘭は俺の正体を知ってて、かつ、俺に自白させたいんじゃないか・・・と。そしてコナンはここで大きな失敗をしてしまったのである。

コナン「蘭、聞いてくれ。俺は工藤新一だ。俺は、蘭とトロピカルランドに行ったとき、ジェットコースターに乗っていた黒ずくめのやつらに薬を飲まされ気絶した。」

コナン「そして、気を取り戻したら、幼児化してた。」

蘭「新一・・・やっぱりそう言うこと・・・そうなんだ・・・。なら、前に私が疑っていたことは本当だったんだ!!」

蘭は泣きそうになりながらコナンに叫んだ。そして、メインデッシュユを持っていこうとしてウェイターが、怖くて持っていけなかったのである。（開店後間もなくの時間だったので客は結構居た。）

蘭「何で、何で私にはずっと隠し通していたの？私じゃ頼りないから？それとも、私じゃ力になれないから？」（涙）

コナン「いや、本当はお前を守りたかったからなんだ。」

第2シリーズ蘭の告白 蘭、正体暴く(後書き)

コナン(新一)が蘭を守りたい理由とは？

第2シリーズ蘭の告白 蘭、正体暴く後編

蘭「えっ、私を守るためってどういう事？」

コナン「・・・お前、自分の命と引き換えで俺の話を知りたいか？」

蘭「私の命と引きかえてどうということ？」

コナン「・・・それは、お前の命が危なくなる可能性があるってことなんだよ!!！」

蘭「何で新一の理由を聞くだけで私の命が危険にさらされるの？」

コナン「ああ・・・」

蘭「・・・分かったわ。私、新一を守るためなら私の命をかけてでもこの話を聞く!!！」

コナン「・・・そうか、蘭。ならここを出て、オレんの家で話そう。」

蘭「わかったわ。」

こうして蘭とコナン（新一）は、出されたフルコースを食べ、お金を払ってレストランを出た。（この料理の代金は、コナン（新一）持ちのカードだった・・・）

それから、この話は余談になるが、コナンの正体が蘭に対して暴露されたその席は、一種の伝説となり、有希子&優作のカップルが結婚できる席の様なことになり、「秘密を暴露させる席」という名前がつけられ、このレストランの宣伝に大いに役立ったという。そして、浮気している人や、大きな隠し事をしている人にとっても怖がられ、それらの行為を疑ってる人には、格好の席となった。

そして、コナン（新一）と蘭は、新一の家である工藤邸で蘭に対して新一の本当の正体話した。

工藤邸

コナン「・・・蘭、本当にお前の命をかけてでもこの話を聞きたいのか？」

蘭「ええ、幼馴染として・・・かな。」

コナン「……………分かった。ならこの話をしよう。」

蘭「(やっとこれで新一の今までが分かるのね……………)」

第2シリーズ蘭の告白 蘭、正体暴く後編（後書き）

こんばんは、たくみ226です。

前の話に組み込み忘れてたやつを入れたんでこんなに伸ばしてしまいました。

次の話あたりでコナンは蘭にまもりたい理由を言います。

第2シリーズ蘭の告白 コナン、真実を言う

コナンはここで、ゆっくりと言葉を選びながら、慎重に蘭にこれまでの経緯^{いきさつ}を話した。

コナン「まず、俺がこんな姿になった理由だけど、それは、蘭と行ったあのトロピカルランドでの出来事だった……」
すると、欄はある人を思い出した。ジエットコースター殺人事件のときにいた黒ずくめの2人組みの男の事だった。

蘭「新一、それってまさか、あの時のあの黒いコートを着ていた人たち？」

すると、コナンは正直に答えた。

コナン「ああ。そうだ、あいつらは通称、黒の組織という大規模な犯罪組織の一員で、コードネームはジンとウオツカ……」

蘭は少々疑問に思った。ウオツカなんて名前は、人名より洋酒のような名前だからだ。

蘭「外国のお酒の名前……」
「そういえばなんか昔そんな差出人からお父さんに何か招待状が来ていたようだけど……あつ、仮装パーティーのときね。確か……確か……」

コナンは、続いて、その辺りのことをしゃべりだした。

コナン「そう、蘭のおっちゃんにきた招待状の差出人の^{ヴァー}vermou^{ムス}uth……あれもその組織に一員だ。日本読みでベルモット。女で、変装の達人だ。」

すると、蘭は、そのことを思い出してきた。そして、その事との関連を新一に確認するように言った。

蘭「・・・そういえば、あの時、なんかあったような・・・あつ、ジヨディー先生や哀ちゃんがいいたときの・・・あの銃を持っていた女の人。ジヨディー先生はただの誘拐事件だって言っただけど、あの時にいろんな銃声が鳴っていたから不思議だったんだけど、それと関係あるの？」

コナンは、ここまでしゃべってしまったのは、間違いなく組織に消される対象に入ってしまう（いや、既に入っているのかもしれないが・・・）ので、この辺りで自制しようと思ったが、蘭の顔を見ると、『蘭はこの話を中断させることを望んでいない。蘭に、新一オレが組織の犠牲になった時、もしくは、蘭自身アイツが犠牲になったときに、蘭だけが知っていないのは酷だ...』そう思うようになった。そして、コナン（シンイチ）の心の中に『ここから、蘭に今までの全てを話そう...』そう思った。

コナン「蘭、やっぱり覚えていたのか？あの時、気絶していたから覚えていたかどうか気になっていたが・・・」

蘭は確認するように言った。

蘭「ということは・・・」

コナンは、静かに首を縦に振って言った。

コナン「そうだ。あの時にいて、灰原を殺そうとしていた女、あれがベルモット、本名は『クリス・ヴィンヤード』しかし、オレは、ある確信を持ったんだ。かのじよは・・・『シャロン・ヴィンヤード』だ。」

蘭は疑問を持ち、新一に尋ねた。それもそうだ、死人であるはずのシャロンが生きているわけが無いからだ。

蘭「エッ？あのシャロンさんが？何言っているの新一。あの人はもう死んだ人なの・・・」

コナンは、淡々と蘭に探偵工藤新一の（ジブンの）”仮説”を話した。

コナン「オレが奴らのやっていることを見てきたが、それくらい簡単だ。シャロンのその変装を使って、他人が偽装することくらい簡単だ。それに、俺は娘のクリスの存在も疑問に思っている。」

この言葉に蘭はひどく疑問に思った。

蘭「どうということ・・・？」

コナンの心の中は、今でも尚、揺れていた。『蘭に全てを話そうとしてよかったのだろうか？』という感情と、『いや、それなら、今までオレはなんで蘭に自分の正体や、組織のことを隠していたのか？』というものが交差していた。コナンは、静かに口を開いた。そして、その中から達した結論は・・・

コナン「蘭・・・悪い。もうこれ以上詳しくはオレの口からは話せない。でも、これだけはオレの口から言わせてくれ。オレは・・・オレは、蘭が・・・」

第2シリーズ蘭の告白 コナン、真実を言う（後書き）

こんばんは、たくみ226です。

この『コナンへの思いの爆発』の久しぶりの投稿になりました。今まで『コナンと黒の組織との決戦』や、『最高のクリスマスプレゼント』の製作に集中したので、この次作の製作をしていませんでした。多分、この作品は、次回は2月中になるのではないのかなと思います。

読者の方々には大変迷惑な話かもしれませんが、ご了承ください。

第2シリーズ 蘭の告白 小さなプロポーズ

コナンは、恥かしそうに蘭に何かの言葉を言おうとしていた。

コナン「でも・・・オレは、蘭が・・・蘭が・・・」

蘭はコナンの言葉に無きかの期待を持ちつつ、その言葉を聴こうと、そして、その返事を決めようとしていた。しかし、コナンが一向にその言葉を言わないので、蘭は心の中でもったいぶっているコナンに少々の怒りと疑問を感じていた。

蘭「何、どうしたの？何が言いたいの、新一？」

そして、コナンは意を決して蘭に自分の心の中にもあり続けた言葉を発することにしようと思った。

コナン「蘭、オレはお前のことが好きだ。この地球上の誰よりも・・・」

この瞬間、蘭は驚いた。しかし、蘭はそれ空数秒としないうちに笑い出した。

蘭「えっ・・・クスクス・・・ハハハハ・・・」

この蘭の様子にコナンはかなり不満だった。この告白の言葉にいくばくの不満でもあったのだろうか？コナンはそれを蘭に少し怒ったような顔と声で聞くことにした。

コナン「どうした、蘭。何がおかしいんだよ？」

そして、蘭はその理由を包み隠さず、笑いながらコナンに答えた。

蘭「だって、新一ったらお父さんがお母さんに言った台詞とほとんど同じ言葉を言ってるんだもん……」

コナンはその言葉にひどく衝撃を受けた。コナンからしてみれば、『非常時には役立つオヤジかも知れねえが、普段はあの怠けようだぜ……一緒にすんなって……。』というようなものである。まあ言えば、コナンは少しの不満さを感じていたことになるだろう。そして、バツの悪そうな様子で蘭に言った。

コナン「ったく……あの親父も良くそう言う台詞を考えるもんだな？ 蘭、どうなんだ。オレの告白、『YES』^{イエス}なのか『NO』^{ノー}なのか……」

すると、蘭は嬉しそうになっこりと笑ってコナン言った。

蘭「新一、私はあなたのことが好き。……でも……考えさせて。」

その答えに、コナンは心底驚いた。コナンは自らの告白をすっかりOKしてくれるものだと思ったからだ。

コナン「あ……ああ……いいけど、どれくらいで返事をくれるんだ？」

すると蘭は少し考えながら言った。

蘭「そうね……一週間かな。まだコナン君が新一だったって事がものすごくショックだし……それに……。」

コナンはその蘭のもったいぶった言葉が気になったので、「それに……何なんだ？」

すると蘭は「……止めとくわ。でも、答えは一週間後に出すわ。でも、新一、あなたは どうするの？」

その蘭の言葉にコナンは「エッ？何のことだ？」と蘭に聞き返した。

蘭は、少し照れながら言った。

蘭「住むところのことよ。コナン君が新一って事は新一と私が・・・『同棲』してることになるじゃない。それはちよつと不味いんじゃないかな？と思ったんだけど・・・どう？」

コナンは、声を少し詰まらせて言った。

コナン「そ・・・そうだな・・・。じゃあオレは博士のうちに泊まる。それでいいよな？」

蘭は申し訳なさそうに言った。

蘭「そうね・・・その方がいいわ。新一、もしあなたに何か言いたいことが会ったら『新一の携帯電話』に掛けるわ。私新一の携帯番号知ってるし・・・。」

するとコナンはそれを認めた。

コナン「分かった。じゃあな・・・。」

そうして今回はこれで分かれることにし、また今度別のところで会うことにした。

正体が分かってしまったわけなので、一緒の家にいることは気まずくなるだろうし、蘭が『時間が欲しい』と言ってるわけなので、小五郎には『お泊り会』と称して博士のところにと行くと伝えた。

第2シリーズ 蘭の告白 追い出された少年

阿笠邸

ここには、阿笠、哀、そして、毛利探偵事務所から追い出されたコナンがいた。

ここでコナンは、自分が蘭にばれてしまった経緯をすべて阿笠と哀に言った。

「・・・と言うことで、蘭に俺の正体をばらしてしまったんだ・・・」。

博士はとても驚いた。あれだけ堅く口を閉ざしていたのにもかかわらず、コナンは言ってしまったというのだから・・・。

「新一、本当に蘭君に君の正体をばらしたのか？」

コナンの顔には、悲しさや悔しさとも捕らえる事ができた。コナンは、意気消沈した様子で阿笠と哀に言った。

「あ、ああ・・・我慢できなくなっただけだ。」

ここですかさず哀が噛みついた。

「どうして、工藤君？あなた、蘭さんを守るために今まで彼女の目の前にいながら隠し通してたんじゃないの？」

「ああ・・・でも、蘭の悲しさに揺さぶられたのはあるけど、蘭に待ってもらわないと、俺が元の戻る理由がなくなっちゃうからな。」

哀は、コナンに待っているであろうこの先の事を聞いた。

「じゃあ、これからあなたはどう生活していくの？」

コナンは考えながらも、「そりゃあ、自分の家に戻るか、もしくは……」

そういつた瞬間、哀はコナンを含みを持たせつつも牽制した。

「イヤよ、あなたと生活したくないわ。まあ、工藤君が私の私生活を覗きたいというんなら私に考えがあるけど……」

コナンはその言葉を聞いて、『自分のプライド』とかがあるので敏感に反応した。

「い、いや……止めとく。オレの家で生活する。父さんや母さんがいない間は自炊とかしてたし……」

阿笠は心配そうにしてた。何せ、コナンの新一時代に作ったものは焦がしたりしたものが多く、食べ物も『蘭のおすそ分け』以外ではスーパーの惣菜コーナーで買ったりしてたものばかりだったからだ。当時は蘭の『おすそ分け』の食事で何とか健康バランス等は保てたものの、それは今回期待できる確率は蘭が新一を拒絶しているところがあるために、今回はそれに期待できる確率は薄いからだ。

「じゃが、新一、一人で全部できるのかね？」

コナンは自信を持って言った。

「大丈夫、だから自炊や洗濯とかはした事があるって。だから心配するな。」

阿笠はそのコナンが大丈夫か気にしながら言った。

「いや、それがある程度はできることは知ってるんじやが、そう言うことじゃなくて、新一は小学生の体なんじやから……」

ここで哀が口を挟んだ。

「なら、食事とか洗濯は家に持ってこればいいんじゃない？」

阿笠は、哀がとりあえず認めたと言うことで、コナンを今日はこちらに泊めることにした。

「なら、新一、今日は遅いからうちに泊まっていきなさい。」

「博士がそう言うてくれるんなら、今日はここに泊まることにするよ。」

コナンは明日から自宅に住みつつも、食事等は阿笠の家で済ます事にした。この事がコナンの人生を大きく変えていくことになるとは知らずに……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9961a/>

コナンへの思いの爆発

2010年10月8日15時04分発行